

『源氏物語』の「さうざうし」

川口 敦子

はじめに—「さうざうし」について—

「さうざうし」とは、あるべきものがなくて物足りない様をいう。『日本国語大辞典 第二版』では、次のようにある。

あるべき物事がなくて、もの足りない気持がする。てもちぶさたで、心さびしい。

その語源については、古くは、「さびし」の意として、「サビサビシ」の音便だとする説や、「サブサブシ」の平語とする説があった。また、蕭条の字を転じて「蕭条シ」もしくは「蕭々」とする説など、語源は定まらなかつたが、『新撰字鏡』に拠り、今は「さくさくし」の音便という説が有力である。「寂々」の字を当てる説もある。「さうざうし」の研究については、原田芳起氏が『平安時代文学語彙の研究』や『小学館古語大辞典』の「さうざ

うし」の注記の中で述べられている。「さうざうし」の類義語には、「さびし」と「つれづれなり」という語がある。これら三語の違いについては、原田氏によると、「さうざうし」は主観的状态、「さびし」は客観的状态を示す場合が多く、「つれづれなり」は境地的なものである。また「さびし」「つれづれなり」に対して「さうざうし」は情趣的なものではないとする。

次に、上代から中世の主要文学作品における「さうざうし」の使用数について確認したい。主な作品全三十作品の「さうざうし」の使用数は次の通りである。

【万葉集】…0 【古今和歌集】…0 【後撰和歌集】…0 【土佐日記】…0 【蜻蛉日記】…5 【和泉式部日記】…0 【枕草子】…9
【紫式部日記】…2 【更級日記】…0 【方丈記】…0 【徒然草】…2
【竹取物語】…0 【平中物語】…1 【伊勢物語】…0 【落窪物語】…4
【うつほ物語】…25 【大和物語】…1 【源氏物語】…83
【堤中納言物語】…2 【夜の寝覚】…2 【浜松中納言物

語』…0 『栄花物語』…11 『大鏡』…5 『狭衣物語』…1 『今昔物語集』…2 『とりかへばや物語』…6 『平家物語』…0 『宇治拾遺物語』…0 『保元物語』…0 『とはすがたり』…0

『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』では、「さうざうし」の用例は見つからず、「さうざうし」は「歌ことば」ではないということが分かる。対して『落窪』『うつほ』『源氏』『栄花』など、物語において多用が認められる。また日記・随筆作品については、「蜻蛉」「枕草子」などで使用があるが、同年代の『源氏』八十三例に対して『枕草子』がたったの九例しかないことから、「さうざうし」が概ね「物語ことば」として文学作品において存在していたといえるだろう。その中でも、『源氏』の八十三という数は他の物語作品と比べて抜きん出ている。『源氏』以前の物語では、『竹取』『伊勢』など平安初期の主要な作品では使用がなく、『落窪』『うつほ』で本格的に使われるようになったようである。しかし『うつほ』の二十五例を除いては、その使用数は少ないといえる。源氏以後の物語では、『栄花』『大鏡』という歴史物語や『とりかへばや』などで数例見つかると、やはり使用数は少なく、『平家』『保元』などの時代になると用例は見られなくなる。このことから、「さうざうし」は『源氏』に特徴的な語彙であることが分かる。

そこで本論では、『源氏』を軸に「さうざうし」について考えていきたい。「さうざうし」が作品のどのような場面で使われる

か、何に対して「さうざうし」と感じているか、それは作品にどのような影響を及ぼしているか。『源氏』における「さうざうし」の特徴、役割について考察していきたいと考える。逆に言えば、『源氏』で特徴的な「さうざうし」について調べることによって、『源氏』という作品の特性を見ることができるとはならないだろうか。

第一章 『源氏物語』における「さうざうし」

一節 文脈から見る「さうざうし」

『源氏』における「さうざうし」について、まずは対象・場面という視点から考察を始めることとする。「さうざうし」とは「物足りない」という意味を持つ。例えば、次のような例がある。

夕つ方、神事などもとまりてさうざうしきに、つれづれと思しあまりて、五の宮に例の近づきた参りまふ。(朝顔)

藤壺の喪中で神事が中止になった折のことである。今まで通りならあったものが、事情によりなくなってしまった。それ故源氏は物足りなく、寂しく感じる。このように、「あるべきものが無い」という、心が満足しない様子を表すが、「さうざうし」の基本の形である。『源氏』の八十三例を、「さうざうし」の対象となるもので分類した時、以下のように分けることができる。

- ①人の不在による「さうざうし」さ 三十八例
- ②男女間の色恋に関する「さうざうし」さ 十八例
- ③宴や祭りなど、行事に関する「さうざうし」さ 十二例
- ④退屈な時、物寂しい時の「さうざうし」さ 八例
- ⑤その他 七例

①の「人の不在」については、対象や場面設定によつてさらに小分けすると次のようになる。

I人が亡くなる II人と別れる・会えなくなる III寂しく暮らす IV子どもも不在・少なさ

I・IIは、死別や屋敷を離れるなどで、人と別れ別れになる(なつた)ことに対する「さうざうし」さである。これまで存在していた人間が己の周りから消えてしまふ、その物足りなさ、寂しさを表現する語となつてゐる。Iの場合は死という永遠の別れであり、「さうざうし」の原因となる人物はこの世には存在してゐないことになるが、IIの場合は距離的な別れである場合が多い。「さうざうし」の原因となる人物は感情の主体者と同じ世界に生きてはゐるが、会えない状態である。IIIは、I・IIによつておこる心細い生活に対する語として使われている。一緒に暮らしていた人物との別れにより、「独り住み」になったり、寂しい生活を送る。I・IIが人との別れという出来事に対して「さうざうし」

し」さを感じるのに対して、IIIはその後の生活、環境に対して「さうざうし」さを感じるのである。その「さうざうし」さの中には、亡き人や過去に対する思いがある。IVについては、源氏の君の子どもの少なさに関する使用が多い。子ができず(少なく)「さうざうし」かつたが、新たに子が入つた、などの最終的に「さうざうし」さが満たされた用例が多い。②については、特に男性視点での、女性に関する様々な事への物足りなさと言う場合が多い。また、

御齡のほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、すきたまはざらんも情けなく、さうざうしかるべしかし：(夕顔)

のような、男が色恋事に対して真面目すぎるのも物足りないといふことを述べているものが三例ある。それによつて、男の好色を讀者に説明付けていると考えられる。「さうざうし」は物足りない状況を強調し、その物足りなさを満たすための行動を説得づける役割があるといえる。③は、宴や祭りなどの催しものに対し何か物足りなさを感じる時、またそれが中止もしくは見に行けない時に使われている。④は、日々の生活の中で起こる、手持ち無沙汰な時である。「さうざうし」い時間の慰めに、人と会つたり会話を楽しんだりする。これらは、会話が始まる前、物語が動き出す前の場面で、「さうざうし」い場面が物語の導入となつてゐる。

その他に、①④のいずれにも分類できなかったものが五例ほどある。会話の中で相手が自分の思うような言動をしないことに對して「さうざうし」さを感じている場面などである。

以上のように、『源氏』では「さうざうし」は様々な場面で使われているが、おおよそいくつかのパターンに分けることができず。またその役割については、以下が考えられる。

- ・あるべきものがなくなったという喪失感を強調する
- ・満たされないものを満たそうと行動するきっかけ・理由づけ
- ・満たされないものが満たされたいしさを際立たせる

喪失感を強調することによって、なくなったものの存在が際立つ。それによって、喪失感を慰めるための行動の動機付けができる。そして物足りなさが満たされた時、過去の満たされない状況を振り返ることによって現在の充実した状況が際立つ。「さうざうし」の対象として描かれているものは、人々にとってそれが満たされるべきもの、満たされてほしいものだと示している。それらは人々の人生において重きを占めるもののはずである。人々にとってそれが己の人生を充実させるものだからこそ、それを求め、得られない場合は「さうざうし」さを感じるのである。『源氏』の世界では、その満たされるべきもの、満たされてほしいものは男女の關係、子どもの存在、行事の存在などであり、一生の中で繰り返られる人との交流である。恋愛などは、

現代の価値観にも似るところがあるかもしれないが、行事や風流ことは京に住む貴族にとって、我々が考えている以上に生活の大事な一部であったのではないかと考える。

二節 卷・人物から見ると「さうざうし」

次に、「さうざうし」に関わる巻や人物のかたよりを見ながら、「さうざうし」について考えていきたい。「さうざうし」が多く使われている巻は「葵」で、八例ある。続いて「若菜下」七例、「若菜上」六例、「帚木」一例、「幻」五例となる。「葵」では、葵の上の死後、その悲しみを綴る表現として使われているものが三例あり、その他五例は用途が様々で、場面、感情の主体、「さうざうし」の対象となるものは異なる。しかしそのほとんどは、葵の上の死が原因となつて起こるものやそれを誘導するもので、「葵の上の死」が軸となっている。「葵」は葵の上の死によって紫の上が正妻となるなど、物語が大きく展開する巻である。「若菜」は、その前の玉鬘十帖中、七つの巻で「さうざうし」が使われていないのに対し、上下を合わすと十三例と、使用数が多い。この巻も、「葵」と同様、女三の宮降嫁という、物語が大きく動く出来事が起こる。「若菜上・下」では、冷泉帝や艶黒、真木柱、蜚兵部卿宮、朧月夜など様々な人物の動向を描く中で「さうざうし」が使われている。源氏については、「若菜上」では三例、「若菜下」では二例が源氏が心情の主体である。その多くが、自身の子に関連する「さうざうし」さであり、晩年の源氏にとって己の

血筋の行く末が気がかりであったことが分かる。

さて、「源氏」の登場人物の中で、「さうざうし」の心情の主体になる人物は、多い順に源氏二十六例、紫の上七例、大宮四例、匂宮四例、薫四例、朱雀帝二例、冷泉帝二例、頭の中将二例である。紫の上と大宮を除くと高貴な男性に集中している。このうち、紫の上の心情の主体である七例のうち五例は、源氏の主観である。紫の上の心情は源氏を通して語られているという点が特徴的である。「さうざうし」は会話の中でも多く使われている。八十三例中三十四例が会話文で、話し手は源氏が十八例と半分以上を占め、大宮が三例、朱雀帝と匂宮が二例ずつとなる。「さうざうし」という言葉を使うのは高貴な人間が多いことが分かる。

また、人物が「さうざうし」の対象となる例は、用例が確実なものだけで見ると、源氏八例、葵、薫、中の君、浮舟などが一例挙げられる。人物が「さうざうし」の対象となる例というのは、ある人物（主体）が他の人物の性格、行動など、人物そのもの（対象）に対して「さうざうし」さを感じることで、つまりマイナスの印象を持つことを意味する。源氏については、源氏に恋焦がれる女房が源氏の色恋事に関して「さうざうし」と感じている場合や、源氏の子が少ないことに對する「さうざうし」さなど、世間一般の源氏の評価として用いられている例が多い。薫は源氏と同じように、色恋事に対して真面目であることの不満である。葵、中の君、浮舟は男女の関係において、相手の男性（源氏と薫）が女性の態度に物足りなさを感じる例である。人物が対象と

なるのは男女の恋愛事に関わる場面で、その際心情の主体は男性が多く、対象は女性に比重が置かれる。男女の立場の差が浮き彫りになっているといえよう。

三節 「さうざうし」「さびし」「つれづれなり」三語の比較

この節では、「さうざうし」の類義語である「さびし」「つれづれなり」について触れたい。「源氏」の中で「さびし」は五十例を見られる。五十四帖中二十七の巻で使用されており、巻のかたよりを見ると、「蓬生」が六例で最も多く、次いで「幻」「橘姫」五例、「末摘花」四例、残りは二例もしくは一例となる。「さびし」は主に、邸など人物が住まう環境を描写する際に使われている。その他、「さびし」を「さうざうし」と比較すると、次のような特徴が分かる。

「さうざうし」との相違点

- ・地の文が多い。(五十例中四十例。対して「さうざうし」は八十三例中四十九例)
- ・歌での用例がある。
- ・寂しい暮らしなど環境の客観的説明が多い。
- ・「さうざうし」との共通点
- ・人の不在による寂しさを意味する。

次に、「つれづれなり」は、『源氏』の中で一一五例あり、三十九の巻で使用されている。巻のかたよりは、「手習」九例、「橘姫」七例、「葵」「賢木」「須磨」六例、「若菜下」「幻」「東屋」「浮舟」五例と続く。玉鬘十帖の中では六つの巻で使用がなく、それ以外では凡そ全編に亘って用いられている語である。「つれづれなり」は何もすることがなく所在ない様を表す語であり、『源氏』でもそのような意味で使われている。特に、雨や夕暮れの折や、明石や宇治などの土地にいる人物の境地を表現するものとして使われている。「つれづれなり」の特徴は次の通りである。

・地の文が主だが、会話文もある。(地の文六十六例 会話二十五例)

・手紙に使われる。(八例)

・宇治十帖での多用がある。(三十七例)

・寂しい住まい、雨の日、物思いなどの場面で使われることが多い。

・「さうざうし」「さびし」という類義語と並立しても使われる。

次に、三語を巻で比較する。

三語の巻別使用頻度順位

- ①十五例 葵・幻 ③十三例 若菜下・橘姫 ⑤十二例 東

屋 ⑥十例 須磨 ⑦九例 若菜上・宿木・手習 ⑩八例
賢木・蓬生・少女 ⑬七例 帚木・未摘花・薄雲・朝顔・浮舟

「さうざうし」の巻別使用頻度順位

- ①八例 葵 ②七例 若菜下 ③六例 若菜上 ④五例 帚木・幻 ⑥四例 朝顔・少女・東屋 ⑨三例 濤標・玉鬘・宿木

三語では上位に入っているもので「さうざうし」のみでは用例が少ない巻は、「橘姫」「須磨」「手習」などがある。これらは舞台がそれぞれ宇治や須磨、小野の里に移り、一層寂しい環境になった様子を描くための説明文として「さびし」「つれづれなり」が使われていると思われる。ここから分かることは、「さびし」「つれづれなり」は環境の客観的状态を指す場合が多いこととである。つまり環境に重きを置いている。それに対して、「さうざうし」は、「葵」「若菜上・下」など、多くの様々な人物が登場する巻、しかも場面の移り変わりが激しい巻で人物の心情を表すものとして使われており、人物が主軸となっている。「さうざうし」は『源氏』において、人物の性格や心情、人間関係と密接に結びつきながら、物足りない様を表している。

第二章 その他周辺作品における「さうざうし」

最後に、「源氏」周辺の作品『落窪物語』『蜻蛉日記』『うつほ物語』『枕草子』『紫式部日記』『栄花物語』『大鏡』ととりかへばや物語」における「さうざうし」の使用方法について述べたい。

『蜻蛉』では、主に行事の折の所在ない空間に対する物足りなさと、男女の恋愛に関わる物足りなさを表現する用例が見られる。兼家との関係では、作者ではなく兼家を主体とする心情として登場している。「うつほ」は、使用数も多く、用法も様々であるが、凡そ「人の不在」に関わるものが多い。「うつほ」は貴族社会を描いた長編物語であり、年中行事を細かく描いている点特徴的である。そのため、「さうざうし」が使われているのも行事の場面が多い。行事や後宮などの王朝世界で一般的に見られる場面、その中で、「さうざうし」の主体、原因となる人物の人間関係が描かれている。「枕草子」は、作者の日常的な生活で起こる出来事や会話の中での使用がある。「うつほ」「栄花」「大鏡」がある程度の法則に従った使い方であるのに比べ、「枕草子」はそれぞれの人物・場面に従った独特の描写である。物語と日記・随筆の違いのように思う。「栄花」は、歴史物語として、宮中で起こる公式的な出来事を叙述的に描いている。ただ、史実と異なる描写もあり、物語を意識した、意図的な「さうざうし」の使用がある。「栄花」では、物足りないという負の感情を描くこと

で、その原因となる喪われたものの価値を高めている。「大鏡」では、あるエピソードの冒頭での使用が多い。「さうざうし」を契機に物語が動き出し、その話の見せ場へと進んでいく。見せ場とは、主に道長の素晴らしさが描かれている場面である。「とりかへばや」では男女の色恋事で使われている。「さうざうし」が使われている場面は、「源氏」などでもよく見られたごく普通の男女の恋愛に関する場面である。しかし男女が入り替わるという独特な設定によって、それがもたらす意味は滑稽なものとなる。

このように、他作品の「さうざうし」が使われる場面やその対象となるもの、その心情がもたらす意味は「源氏」の場合と大きな相違がないといえる。特に源氏以前の「うつほ」は「源氏」の用例と似た点が多くあり、その影響関係が考えられる。更に「源氏」以降の作品、例えば「寝覚」などは、「うつほ」「源氏」を受け継いだ使用の形が見られる。また「さうざうし」は、日常の会話の中でも、地の文としても使われているが、和歌で使われる用例はなく、情趣的な役割は持っていないようである。「さうざうし」は「源氏」に代表される語ではあるが、「さうざうし」がもたらす意味は、その他周辺作品の例によっても、何うことができると考える。それは何を物足りないかと感じるかという点で、それぞれの物語世界や登場人物の価値観を表すものである。そして全体を通して、無いもの（無くなったもの）に対する想いの強さと、物足りなさを埋めるための行動を強調する役割がある。

おわりに

本論では、『源氏』における「さうざうし」について調べたことよって、『源氏』での「さうざうし」は、使われる場面、対象、原因にある程度の特徴があることが分かった。また「さびし」「つれづれなり」と比べて、源氏を中心に、人物の主観と密接に関わる心情語彙であることがいえた。何故他の作品と比較して、『源氏』では「さうざうし」が多用されているのだろうか。

例えば作者が同じである『紫式部日記』では二例しかなく、作者の特徴である、とは言い切れないだろう。やはり、比較的使用の多い『うつほ』『栄花』と合わせて考えると、王朝世界を描いた物語に特徴があるのではないかと考える。つまり、年中行事や宴、後宮、恋愛、結婚、人の死、誕生など、貴族達の人生を物語として描く中で、登場人物達の心情表現として「さうざうし」が何らかの効果を持っていたのである。それは「さびし」や「つれづれなり」では表現しきれない、「さうざうし」の持つ人物の「主観の表出」³という特徴と関連し、物語世界の中で人々が様々な出来事を体験しながら生きていく様を主張しているのである。そのことは第一章一節でも説明した「さうざうし」の対象となるものが人との別れや恋愛、行事などであることによっても導かれる。「物足りない」の対象となる、ということは、すなわちそれが心を満たしうる対象にもなる、ということである。人々にとつ

て満たされるべきもの、満たされてほしいものは男女の関係、子どもの有無、行事の有無や内容などであり、一生の中で繰り広げられる人との交流である。

『源氏』は、源氏を中心に様々な人物が織り成す長編王朝文学作品である。その中で、「さうざうし」は人々にとって大切な人生の一部である事・物・人への物足りなさを表している。その場面の演出と心情の表出によって、登場人物達の人物像を表面・内面ともにより鮮明に表すことができるのではないだろうか。そのため「さうざうし」が使われているのだと考える。

注

- (一) 『源氏物語』【土佐日記】『蜻蛉日記』【和泉式部日記】『紫式部日記』【竹取物語】【平中物語】【伊勢物語】【落窪物語】【うつほ物語】【大和物語】【堤中納言物語】については上田英代氏の「古典総合研究所」(URL <http://www.genji.co.jp/>)に拠った。その他の作品についてはそれぞれ『古典対照語彙表』(宮島達夫 笠間書院 一九七一年)『枕草子総索引』(榎原邦彦ほか編 右文書院 一九六八年)『平安日記文学総合語彙索引』(西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵編 勉誠社 一九九六年)『夜の寝覚総索引』(阪倉篤義ほか共編 明治書院 一九七四年)『浜松中納言物語総索引』(池田利夫編 武蔵野書院 一九六四年)『狭衣物語語彙索引』(塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子共編

- 笠間書店 一九七五年)『今昔物語集自立語索引』(有賀嘉寿子編 笠間書店 一九八二年)『とりかへばや物語総索引』(鈴木弘道編 笠間書店 一九七七年)『天草版平家物語語彙用例総索引』(近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ共編 勉誠出版 一九九九年)『宇治拾遺物語総索引』(増田繁夫等編・境田四郎監 清文堂 一九七五年)『保元物語総索引』(坂詰力治・見野久幸編 武蔵野書院 一九八一年)『とはずがたり総索引』(辻村敏樹編 笠間書店 一九九二年)に拠った。
- (2) 各作品の本文・意味については『新編日本古典文学全集』(小学館)を参考にした。
- (3) 原田芳起『平安時代文学語彙の研究』風間書房 一九六二年
(かわぐち・あつこ 二〇一〇年度本学卒業生)